

註12 「この地域で築城技術の発達した好例は、柏木城のような軍事的緊張に直接対応する城館に多く、領域中枢的な城の場合、近世初頭に大改修されて元の形状をうかがえなくなったものが多いためもあるが、類似の水準を確認できる事例が乏しい。」〔松岡2004a〕

「この地では天正18年以後の改修が考えられないうえ、小振りの石材を垂直的に積み上げた技術は織豊系との相違が明確で、蘆名の築城技術の頂点と評価してよい。」〔松岡2004c〕

引用・参考文献

相田 優ほか 2004 『会津若松市史13 会津の大地』会津史学会編 2009 『新訂 会津歴史年表』歴史春秋社

石川安司 2008「北武蔵の城郭石積み」『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』

石野友康ほか 2012 『金沢城石垣構築技術資料Ⅱ』石川県金沢城調査研究所

石田明夫 1999 「葦名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古』第40号

石田明夫 2001 「東北南部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号 福島県考古学会

石田明夫・佐藤一男 2007 『会津路 武士の世の裏磐梯』

伊藤豊松 2007 「第4章 近世 第7節藩行政下の本村」『北塩原村史 通史編』北塩原村

北垣聰一郎 1981 「城郭用語辞典 普請」『日本城郭体系 別巻Ⅱ』新人物往来社

北垣聰一郎 1987 『石垣普請』法政大学出版局

北塩原村史編さん委員会2007 a『北塩原村史 資料編』

北塩原村史編さん委員会2007 b『北塩原村史 通史編』

齋藤慎一 2003 「戦国大名系城郭論覚書」『戦国時代の考古学』高志書院

佐々木修 1988 「20.柏木城」『福島県の中世城館跡』福島県文化財調査報告書

佐竹正廣 1998 「南奥の中世城館-佐竹氏の進出過程-について」『中世城郭研究』12

鈴木 啓 2013 「山城・平城と石垣」『第一回城サミット福島大会』資料

千田嘉博 1992 「木村館の構成」『東北横断自動車道遺跡調査報告15 木村館跡』福島県教育委員会ほか

千田嘉博 1994 「木村地域の中世社会と城館」『東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪久保城』

千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会

千田嘉博・小島道裕編 2002 『天下統一と城』塙書房

高橋 明 2007a「第三章 中世」『北塩原村史通史編』北塩原村

高橋 明 2007b「第三章 中世編年資料」『北塩原村史資料編』北塩原村

高橋 明 2009 「伊達政宗の会津侵攻」『会津若松市史研究』第11号

高橋圭次ほか 2002『河股城跡発掘調査報告書』川俣町教育委員会

中井 均 2000 「織豊系城郭の展開」『天下統一と城』国立歴史民俗博物館

長島雄一 2007 「第二章第二節＝② 城館跡」『北塩原村史資料編』北塩原村

松岡 進 2000 「南奥羽における築城技術の発展」『天下統一と城』国立歴史民族博物館

松岡 進 2002 『戦国期城館群の景観』校倉書房（初出1998「伊達氏系城館論序説」『中世城郭研究』12）

松岡 進 2004a「城館研究から見た戦争と戦場」『陸奥国の戦国社会』高志書院

松岡 進 2004b「氏康期の北条領国における城館と戦争」『定本・北条氏康』高志書院

松岡 進 2004c「城館跡研究からみた戦争と戦場」『【もの】からみる日本史 戦争Ⅰ』

松本 茂 2001 「木村館の破却」『城破りの考古学』吉川弘文館

村田修三 1981 「城郭用語辞典 城の部位、馬出」『日本城郭体系 別巻Ⅱ』新人物往来社

耶麻郡役所 1919 『福島県耶麻郡誌』（歴史春秋社復刻版1978刊）

渡部新一 1987 『北塩原の城館柵』

関連調査の報告 1

柏木城跡について

石田 明夫

1. 城跡の位置

喜多方市から北塩原村役場を東に、大塩川溪谷沿の国道459号を裏磐梯の桧原方面へ進むと、温泉から塩が獲れたことに由来する大塩裏磐梯温泉がある。住宅と温泉宿が立ち並ぶ大塩集落の南側急斜面上にある杉林、雑木林、畑、水田に石垣を持つ柏木城がある。

大塩集落から主郭部分は、比高約110m高い位置にあり、雄国山麓の北斜面にあたる南西の大久保集落とは約30mの比高となっている。南西からすると攻め安く、北側から見ると、幅約20mで高さ 5 m以上の大塩川溪谷が城の手前にあることから、攻めにくい場所にある。

柏木城が築かれた当時、北東の萱峠から見ると、正面に東西1.1kmに渡り、高さ 5 m以上に造られた土塁と石垣が見え、城に入る門となる大手口の両側には石垣が築かれ、大きな壁となって見えていた。

城に入るには、大久保集落から下ると商工会と駐車場と村活性化センターがあり、そこは清野六郎屋敷跡と伝えられている。その東に位置する大手口との間には、米沢街道が通るように造られている。この場所は、交通の要衝でもあり、主要街道の米沢街道を抑えることにより、人の出入りと、敵の進攻を阻止する役目があったと推定される。

北側には、大規模な土塁で区画するだけでなく、北の大塩川と東の蟹沢川を最終的な外郭とするように工夫して造られてもいる。大塩川の内側に街道と宿場、山塩の生産をしていた小屋が立ち並んでいたと推定される。敵襲などがあれば、村人は、城に入り、加勢することになっていたのであろう。

2. 柏木城の築城時期

柏木城は、伊達政宗の侵攻を防ぐために、米沢街道に面して蘆名氏が築いた守りの城である。『会津旧事雑考』には「是歳（天正一二年）築 大鹽邑柏木森城屬 此邊衆士（『会津鑑』では150騎とある）於三瓶大蔵而令守於伊達氏」と書かれているが、正確に、築城年代は判明していない。

『新編会津風土記』では、蘆名義広によって天正12年に三瓶大蔵を城番とし、伊達氏に対抗し新たに築いたと書かれている。しかし、天正12年とすると蘆名義広ではなく、当時の領主は、盛隆が正しいようである。その頃蘆名氏は、後継を巡って内部混乱が続いていた。

(1) 伊達輝宗、政宗の桧原侵攻と葦名氏の混乱

米沢を領主とする伊達氏は度々、裏磐梯の桧原に侵攻していたと思われる。『檜原戦物語』には、永禄 7 年（1564）、伊達勢は侵攻し、行動を察知した桧原の穴沢俊恒は、桧原峠に空掘を掘り、伊達勢を待ち構え撃退した。その翌年穴沢氏は、戸山に戸山城を築き一族を交代で詰めさせている。永禄 8 年（1565）、戸山城は伊達勢約800人で攻められている。永禄 9 年（1566）、伊達勢は 1 月の雪深い中侵攻したものの穴沢俊恒、俊光らの活躍で撃退する。しかし、この資料は、後世に書かれたものであり、信ぴょう性に疑わしい部分がある。



図 10-1 柏木城跡全体図（石田明夫原図）

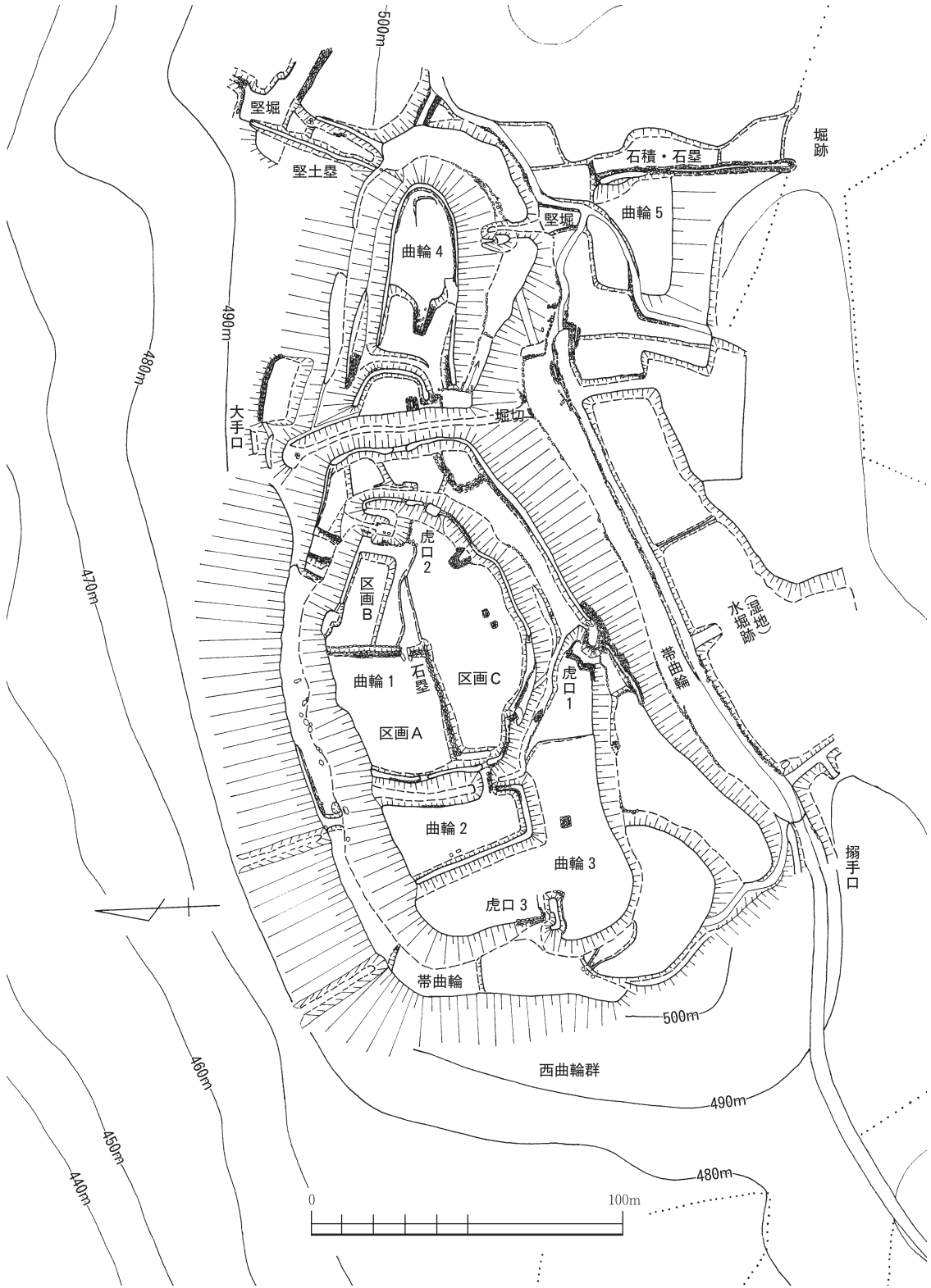


図 10-2 柏木城跡主郭

会津を支配していた蘆名氏は、黒川、現在の若松に居城の黒川城があった。その支配は強固とは言えず、天正8年（1580）6月17日、16代盛氏が死去すると、後継には盛氏の肝煎りで須賀川より人質にしていた二階堂盛隆が継いでいる。

そのころ天下統一を目指していた織田信長に対し、蘆名盛隆は、天正8年8月6日、信長の安土城

へ家臣の荒井万五郎（会津美里町上荒井）を送り、駿馬3匹と蠟燭千挺を送っている。

天正12年（1584）10月6日には、『会津四家合考』によると盛隆が、黒川城内の御殿南縁で鷹を置いて座っていたところ、背後から家臣の大庭三左衛門によって惨殺される事件が発生している。盛隆は24歳の若さで、子の亀若（王）丸は2歳と幼児であったことから、蘆名家は大混乱となる。蘆名家を継いだ亀若丸の母は、伊達晴宗の娘で、盛興・盛隆の夫人であった。天正12年（1584）盛隆が死去すると、秀吉や常陸の佐竹義宣に接近を図った蘆名氏は、政宗と対立するようになり、米沢街道の要衝であった大塩に柏木城を築城したと思われる。

3. 城跡の遺構

大手口から曲輪1（主郭）へ入るには、城の正面となる北側の大手口から入ったようだ。

米沢街道を萱峠から大塩へ下ると、その正面には、興泉寺や、東の台地上に中島氏が築いたとされる中島館が見えた。

大塩川に架かる大塩橋を渡ると、高さ10m以上の断崖の下に街道沿いに配置された大塩集落があり、大手口は、北塩原郵便局の街道南側に位置していたと思われる。

遺構はいくつかの区域に分けられていたようで、北曲輪群にある大手口は、入口が低く、両側が高く造られて門が埋まったように見える埋門形式となっていと思われる。そこから、西側に造られた幅一間の山道をジグザクに上ると、石垣の大手門が待ち構えてと思われる。大手門の西側には、自然地形を利用した大きな土塁が造られている。大手門からジグザクに主郭へ上ろうとすると平場が連続する北曲輪群となる。そして、主郭の曲輪1に入る手前に石積みが積まれた平場の下を通り主郭の曲輪1へ到達する。

(1) 北曲輪群と大手口

北曲輪群には、城の大手口や曲輪1に入るルートがあり、いざという時に家臣団を取りまとめて留めて置く、大きな平場があった。そのため、石積みや城の飲み水を確保する水手もあった。大手虎口は、城が使用されなくなると石積みは破却されたと推定される。西側には、自然地形を利用した土塁の遺構があり、長さ約200mで高さ5mあり、土塁を石で補強して造られている。

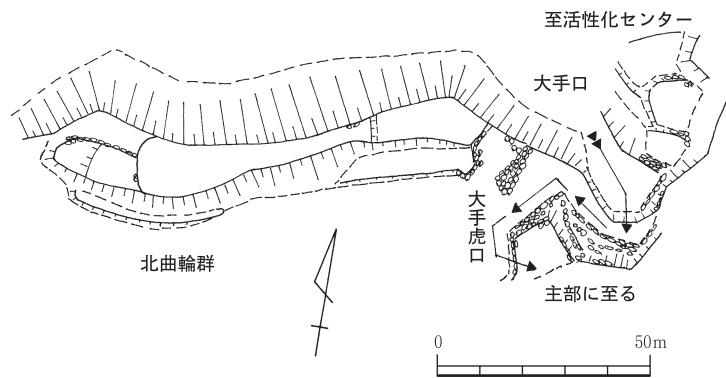


図 10-3 柏木城跡北曲輪群外溝 天正 12 年（1584）築城

(2) 曲輪1（本丸）の遺構

主郭の中心部に入るには、明確で大きな虎口はなく、複雑に造られている。東に進むと北に面して、埋門で造られたものが大手入口と推定される。この門は、敵が侵入した場合、上から大きな石を落とし、門の内側を石や土で塞ぎ開かなくして敵の侵入を防ぎことになっていたようである。門から階段や梯子や細い通路で中に入ると曲輪1の中心部分となる。内部は平坦で、北西部分には、石塁で分けられた区画があり、東向きに門があった。内部には御殿や櫓が建てられていたと推定される。この曲輪の南は、土塁で、南東部には一間四方の櫓台もある。さらに、西と東は空堀で区画され、それぞれ

木製の橋が架けられ、いざという時は橋を落とすことになっていた。

南西部分には、裏口と推定される搦手があり、埋となっていた。また、曲輪は、帯曲輪が巡らされ、南の搦手には、石積石垣で造られた内枳形の虎口があります。門の脇には、魔よけの石「鏡石」が組まれていたようである。虎口の外側は、高さ15mの自然地形を利用した土塁となり、表面は自然石が貼られた土塁となっている。土塁は、いずれも石で堅められ、塀や柵が巡らされていた。南東部分には、石塁で区画された部分があり、何かを保管した倉があったと考えられる。また、西側には石積みの外枳虎口がある。

(3) 馬出しの遺構

曲輪1の東には、木橋と空堀で区画され、その曲輪の形はやや角張った半月形をした馬出がある。角か丸の馬出であり、その造り方は、武田信玄が多用した技法で、甲斐や信濃で発達したものとよく似ている。その遺構は、主郭を死守する役目があったと思われる。また、南側には、石垣となる内枳形の虎口がある。

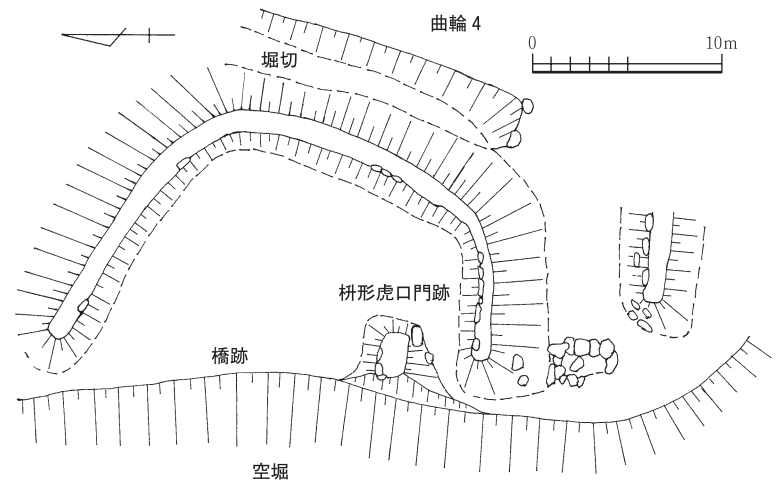


図 10-4 馬出の実測図

(4) 西曲輪群と搦手口

西曲輪群は、曲輪1の西側に位置するもので、通称「ニシグルワ」と呼ばれていた。五段から六段の細長い平場があり、北曲輪群からの道が二本見られる。一部は畑となり、西側には沢を利用した堀跡がある。南東部分に、現在山道となっている所には、裏口にあたる搦手が存在したと思われる。石積みで防御され、南側の水堀の調節も兼ねていたようである。

(5) 東側の遺構

曲輪1の東には、中曲輪群がある。北側が堅堀と堅土塁で分けられ、南側は堅堀と石積み、石塁で曲輪1と嚴重に分けられていた。尾根上には、3段から4段に造られた平場があり、北に面して長さ200m以上高さ約2mの石垣が連続している。石垣の下にも六段の平場群があり、その下は急斜面の崖で、攻めるにはかなり難しい。南には、自然の沢を利用した幅4mから10mの水堀が掘られている。

この曲輪群の東には、石積みで守られた虎口がある。虎口の西側は、自然地形を利用した高さ5mの土塁で、南は、堀で分けられ、北に面し防御が嚴重となっている。

(6) 東曲輪群

中曲輪群の東、柏木城では最も東に位置している。東曲輪群の東端には、幅10mの堀跡で分けられ、さらに外側には自然の丘陵を利用した大きな土塁があり、さらに外側には現在水田となって、堀跡で防御されている。そして、最も東側には、蟹沢川の高さ20mの深い溪谷が最終防御ラインとなっている。丘陵上は平場で構成されているが、北にと東に面し、石垣がある。北側には3箇所石積みで造られた虎口があり、最も東の虎口は、石積みは、良く残されている。

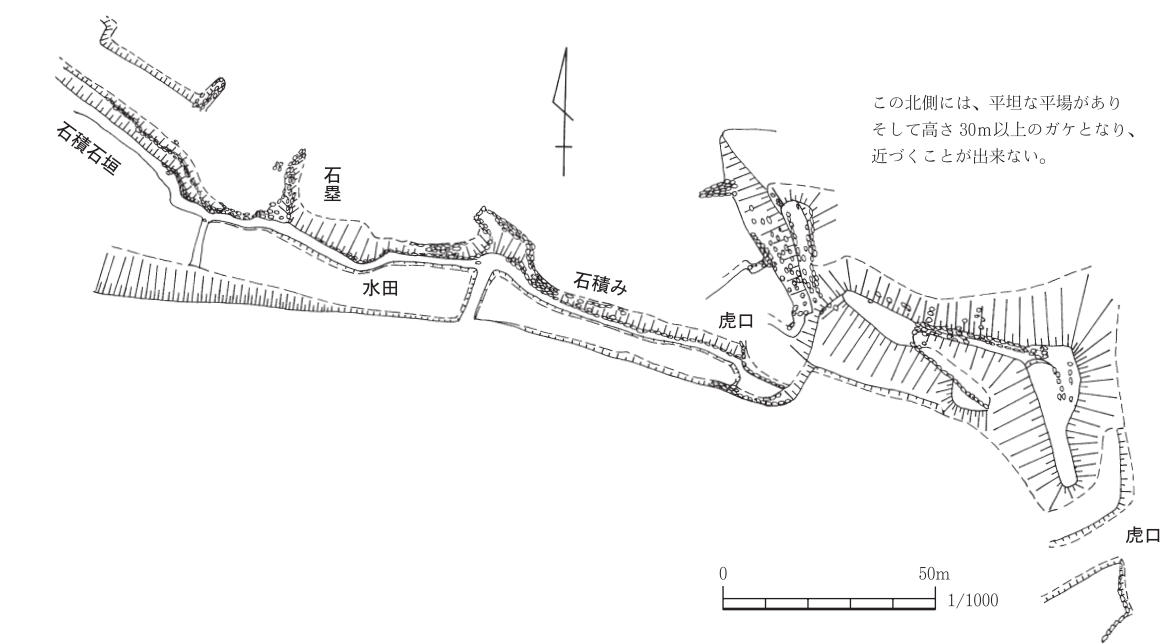


図 10-5 柏木城跡中曲輪群外構 天正 12 年 (1584) 頃築城

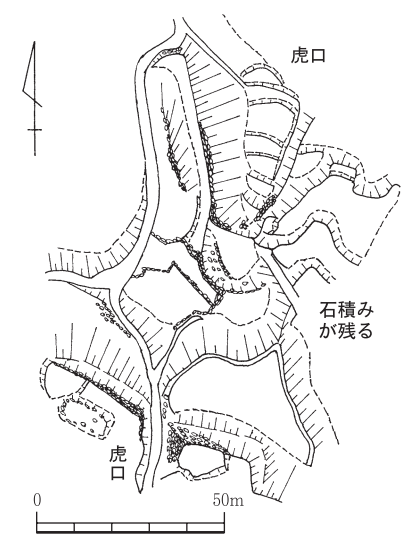


図 10-6 柏木城跡東曲輪群虎口 1
天正 12 年 (1584) 頃築城

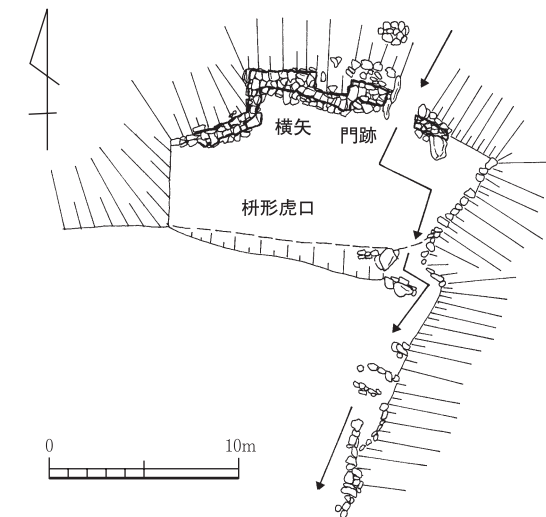


図 10-7 柏木城跡東曲輪群虎口 3

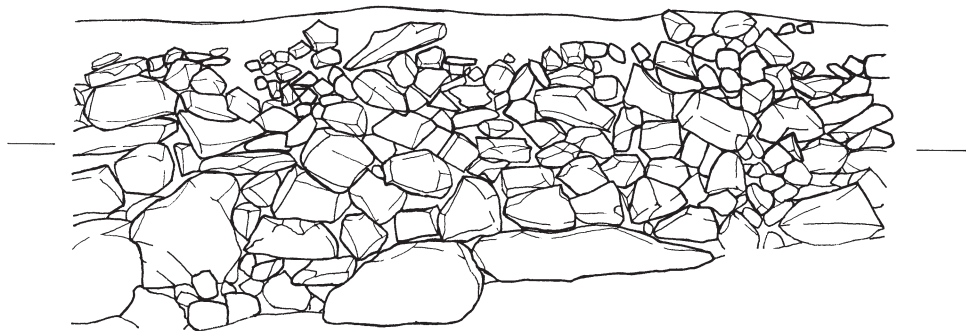


図 10-8 主郭曲輪 5 石積み (S=1/40)

台地北端には、長泉寺と墓地部分に狼煙を上げた古い段階の中島館があった。『新編会津風土記』には「村中ニアリ 地字ヲ中島ト云 今民家トナリ 堀土居ノ形ナシ 天正ノ頃葦名ノ臣中島美濃某ト云モノコレニ居ルト云」と書かれている。

(7) 柏木城の石積み

柏木城の大きな特徴は、石積みが積まれていることである。その石積みは、表面から見れば、若松城や猪苗代城と同じ石垣に見えるが、内部は大きく異なっている。柏木城では、裏側に小石を大量に入れ、水はけを良くして石垣の崩落を防ぐ「裏込め石」が入れられていないのが特徴である。東北では、福島県を中心に約50の城跡で例がある。

4. 柏木城の絵図

柏木城には、城を描いた絵図がいくつかある。「大塩邑柏木森臼城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は江戸時代に描かれたもので、「大塩邑柏木城之図」は、大正 8 年に発行された『耶麻郡誌』に掲載された図である。

『耶麻郡小沼組之図』（村指定）は、江戸時代に小沼組の村々を描いたもので、「柏木古城」と書かれている。「大塩邑柏木森臼城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は、『耶麻郡誌』に描かれた元図のようである。図は、明和元年（1764）から寛政 4 年（1792）までの江戸中期に描かれたものと推定される。

5. 柏木城の最後

この城は、天正17年（1589）の摺上原まで城の改修は続いたものとみられる。天正17年に、『伊達治家記録』によると、政宗家臣原田氏がこの城に入ったときは空であったされている。城跡の石に火災の痕跡が見られることから、火を放って退却した可能性もある。その後、伊達家臣が入ったとも考えられるが、文禄 4 年（1595）の豊臣秀吉よる『富岡文書』にある 7 城以外の諸城は破却命令で完全に消滅した可能性がある。

参考文献

- 石田 明夫 1999「葦名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古』第40号
- 石田 明夫 2000「東北地方の織豊以前の石垣について」『第17回全国城郭研究者セミナー』
- 石田 明夫 2001「東北南部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号
- 石田 明夫 2005『小山田城跡』会津若松市教育委員会
- 石田 明夫・佐藤一男 2007『会津路 武士の世の裏磐梯』北塩原村